

炎の美

「NPO 法人 湖東焼を育てる会」活動展の開催

湖東焼は、江戸時代後期に彦根で焼かれた焼物です。13代井伊直弼なおすけの頃には、彦根藩が経営する藩窯はんようとして黄金時代を迎え、当代の焼物を代表する高い完成度を示す焼物が焼成されました。ところが昨今では、「幻の湖東焼」と称されるほど、湖東焼の名前も作品も知られることが少なくなっていました。

私たちNPO法人湖東焼を育てる会では、これまで、湖東焼の講演会・展示会・絵付えつけや作陶さくとうの体験教室など多様な事業を実施して、かつて彦根に華開はないた湖東焼の普及と啓発に努めてきましたが、今年度は、新たに調査研究事業として湖東焼窯場跡で採集された資料の整理作業も行ってきました。

こうした活動の一端をご紹介します活動展を、下記の要領で開催しますのでご案内します。

【開催日時】 11月23日（日）12:00～16:00

11月24日（祝）11:00～15:00

【開催場所】 中央商店街コジマギャラリー（「山月」向かい）

【開催内容】 ◆活動作品展：会員がこの1年間に制作した作品展

◆絵付体験：来場者による絵付体験（24日のみ／有料500円）

◆湖東焼窯場跡採集品展示・洗浄作業：湖東焼窯場跡で採集した陶磁器片・窯道具の展示とともに、洗浄作業を公開。



絵付け体験のようす



湖東焼窯場跡採集品の洗浄

湖東焼の創始者 絹屋半兵衛

絹屋半兵衛^{きぬやはんべえ}は、彦根城下の内船町^{うちふなまち}に店を構える古着商^{ふるぎ}でした。古着商は現在ではすたれましたが、リサイクルの発達していた江戸時代には主力的な商いで、半兵衛も相当の資力をもった商人だったようです。彼は古着の仕入れを京都で行いました。仕入れの道中、京焼^{かいま}を垣間見る機会も多かったに違いありません。当時、京焼は茶華道^{ちやかどうそうけ}宗家や文人^{ぶんじん}の好みを背景に陶器生産を堅持する一方で、新しく伊万里^{いまり}や瀬戸などの技術的援用を受けながら磁器生産を指向^{しこう}していました。

文政12年（1829）、半兵衛は京都に来ていた伊万里の職人を伴って帰り、彦根城下の商人2人を誘って共同出資の形で、磁器^{じき}を焼く窯を興すことにしました。仲間となった2人は、同じ古着商を営む油屋町の平助^{へいすけ}と御蔵手代^{みくらてだい}の澤町^{うへえ}の宇兵衛^{うへえ}です。彼らは町奉行に願い出て、城下町の西方にある芹川左岸の晒山^{さらしやま}に窯を築き、細工場^{さいくば}を建てました。

初窯は失敗でした。2度目の窯はなんとか成功し、藩主に献上できるまでになりました。ところが、仲間3人のうち平助が早くもこの事業から降り、窯場も佐和山山麓^{かまば}の餅木谷^{もちのきだに}に移すこととなります。ここでの初窯は成功しました。

ただ経営は相変わらず苦しく、宇兵衛も去り、天保2年（1831）からは半兵衛が単独で困難な事業を進めることとなります。起業家^{きぎょうか}に困難はつきもの。困難はやがて肥やしとなり、華やかな湖東焼を誕生させることになりました。



彦根城下に現存する絹屋半兵衛の屋敷